



Title	直示と参照の観点から見直すテンスとアスペクト
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 28, 123-136
Issue Date	2019-05-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74393
Type	bulletin (article)
File Information	123-136-08Yamashita.pdf



[Instructions for use](#)

直示と参照の観点から見直す テンスとアスペクト

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授
山下 好孝

Reanalysis of Japanese Tense and Aspect from a Deictic or Contextual Point of View

YAMASHITA Yoshitaka

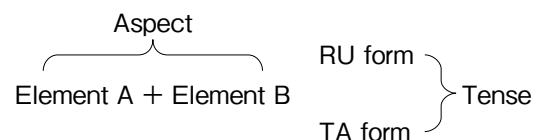
abstract

In the tense system of Japanese sentences the tense of a main clause must be differentiated from that of a subordinate clause. The tense of a main clause is so called “absolute tense”, which is based on the actual speaker’s viewpoint. In other words, it is a deictic expression. On the other hand, the tense of subordinate clauses like noun modifier clauses or clauses which express reason or cause can be analyzed either as “absolute tense” or else as “relative tense”, which is understood based on main clause tense as its reference point. Hence relative tense is a sort of contextual expression.

In contrast to the tense system, the Japanese aspect system is purely semantic. The meaning of an aspect expression is determined by the combination of two elements such as verb and auxiliary verb, verb and suffix, noun and suffix and so on. Each aspect expression can be combined with tense expressions in the RU form or TA form.

In summary Japanese sentences are composed from the following aspect and tense systems.

Watashi-wa gohan-wo $\frac{\text{tabete} - \text{i} - \text{RU} / \text{TA}}{\text{A} \quad \text{B}}$



1 はじめに

山下 (2004) において、いわゆる動詞の「タ形」には「テンス」の用法と「アスペクト」の用法があると論じた。では一体、「テンス」とは何を指し、「アスペクト」とは何を意味するのであろうか。この点に関し、小谷野 (1982) は次のように述べている。

- 1) 日本語では、テンスとアスペクトを切り離して論じるのは難しい。テンスとアスペクト、ヴォイスとアスペクト、テンスとムードが形態論的に絡み合っているからである。

また同論文では金田一春彦氏の研究を引用し

- 2) テンスを「ある標準から眺めた場合、時間的にそれより以前であるか、同時であるか、以後であることを示す形態の違い」とし、アスペクトを「動作・作用の進行の相を示す形態の違い」

とする論理的、意味的な説明を紹介している。

確かにテンスは発話時を「標準 (基準)」とし、時間的に前であるか、後であることを表現する。

- 3) 去年パリに行った。(以前)
- 4) 今、パリにいる。(同時)
- 5) 来年、パリに行く。(以後)

主節におけるテンスは「絶対テンス」とも呼ばれる。

しかし、従属節におけるテンスは主節のテンスを基準点とする場合がある。

- 6) パリに行くとき、(成田空港で) ハンドバッグを買った。
- 7) パリに行ったとき、(シャンゼリゼで) ハンドバッグを買った。

6) では、従属節の「行く」行為は主節の「買う」行為の後で行われたため、現在形 (ル形) で示されている。一方、7) では「行く」行為は「買う」行為の前に行われたため、過去形 (タ形) で表されている。主節の行為が未来に行われる場合も、従属節のテンスと主節のテンスの関係は同様である。

- 8) パリに行くとき、(成田空港で) ハンドバッグを買おう。
- 9) パリに行ったとき、(シャンゼリゼで) ハンドバッグを買おう。

以上の例では従属節のテンスは、主節のテンスを基準点として参照し決定される。従って従属節におけるテンスは「相対テンス」とも呼ばれる。

しかし、従属節におけるテンスが主節のテンスではなく発話時を基準点とする「絶対テンス」である場合もある。

10) 去年、パリに行ったとき、出発地の成田空港でハンドバッグを買った。

山下 (2016a)、(2016b)、(2017) で、何らかの基準点を持った表現を「参照表現」、客観的な基準点をもたず現在の発話者の発話時の視点から述べる表現を「直示表現」と規定し、様々な言語現象について考察してきた。その考えに基づくと、主節におけるテンスは直示表現であり、従属節におけるテンスは参照表現であると見なすことができる。

本稿では、この直示と参照の観点から、日本語のテンスに関して考察を行う。そして、これまでテンスと並べて考察されてきた「アスペクト」についても同様の観点から見直すことを目的とする。

2 | 主節における「ル形」と「タ形」

主節における現在形を「ル形」と呼び、過去形を「タ形」と呼ぶことにする。これは動詞だけでなく形容詞、形容動詞、名詞にも共通するものとする。では、「ル形」は非過去（現在、または未来）を表し、「タ形」は過去（または完了）を表すと単純に言えるであろうか。

では、まず基本的に現在を事柄を表すとされる「ル形」の用法を見てみる。

- 11) 机の上に本がある。(現在)
- 12) 彼は今晚家にいる。(未来)
- 13) 私は毎日車で会社に通う。(習慣)
- 14) 地球は太陽の周りを1年で回る。(普遍的事実)
- 15) 彼は絶対に今日来る。(確信)
- 16) おそらく彼はまだ部屋にいる。(推量)
- 17) 僕も留学に行く。(意志)
- 18) おまえたち、早くする！(命令)
- 19) 今日も外は寒い。(叙述)
- 20) 彼はまだ部屋にいる。(未完了)

これらから分かるようにル形は様々な意味を表す。しばしばル形は現在、および未来を表すと言われるが、13) の例のように習慣を表すと、実際には過去のことにも言及している。

では次に、タ形が含意する意味にはどのようなものがあるかも見てみる。

- 21) 昨日、雨が降った。(過去)
- 22) もうご飯を食べた。(完了)
- 23) 大覚寺にはもう3回行った。(経験)
- 24) (千歳空港から札幌駅にJRで向かう途中、手前の豊平川を渡る時)
さあ、もう、着いたぞ。(確実な未来)
- 25) こんなところにあった！(発見)
- 26) さあ、どいた、どいた。(命令)
- 27) あそこは「23飛車打つ」だった。(後悔)
- 28) お晩でした。(北海道方言) (丁寧)
cf. 「お晩です。」(東北方言)
- 29) (玄関先で) もしもし、毎日新聞の集金でした。(北海道方言) (謙譲)
- 30) (電話にて) もしもし、山下でした。(北海道方言) (謙譲)

このように見てみると、タ形が現在の事態に言及することがあることも理解出来よう。

一方で、ル形でもタ形でも表せない事態も存在する。金田一氏が言う〈第四種の動詞〉の場合である。金田一氏は動詞を以下の4つのグループに分類している。以下は寺村(1984)からの引用である。

31) 金田一氏の動詞四分類

状態動詞：ある、いる、できる 等

継続動詞：読む、書く、(雨が) 降る 等

瞬間動詞：死ぬ、見つかる、始まる 等

第四種の動詞：そびえる、すぐれる、ずば抜ける、ありふれる、(水が) 澄む、(先が) とがる、いい腕をする 等

状態動詞、継続動詞、瞬間動詞は主節においてル形でもタ形でも生起する。しかし、第四種の動詞というのはル形でも、タ形でも現れず、「～ている」の形でしか生起しない動詞を指す。ル形にも、タ形にもならないということは、第四種の動詞は主節において以下の活用の体系をもたないことになる。

32) 活用の体系

ル形	ナイ形
タ形	ナカッタ形

この四つの動詞形が意味することは、時間軸に沿って、もしくは同一時間内である事態が変化するということである。たとえば「食べなかった」人が「食べる」ようになることも変化である。昔は「食べた」人が「食べない」状況になるのも変化である。

そのように考えると第四種の動詞は「変化」を含意しない動詞であるということも出来よう。変化を含意しないため、肯定形にも否定形にもならない。別の角度から考えれば、ル形、タ形が存在する表現は、変化が起こる、起こつ

たことを含意する表現であると言える。たとえ状態動詞であっても、ある時点と、ある時点の間に変化があったことを含意する。

33) 去年まで逆立ちが出来た。今は出来ない。

また第四種の動詞に含まれる「とがる」という動詞でも、変化の意味が含意できる環境下では、ル形、タ形でも生起する場合がある。

34) この機械に通すと、先が簡単にとがる／とがった。

山下 (2004) では「過去」のタ形と「完了」のタ形を区別した。しかし、実際の発話ではこれらが混用されることが多い。

35) A: 昨日、レバニラ炒めを食べた?

B: そんなもの、食べてないよ。

さらにタ形で聞かれても、ル形で答える場合もある。

36) A: 昨日、レバニラ炒め、食べた?

B: そんなもの、食べないよ。

「過去」「完了」という概念はお互いに対立する概念ではなく、ル形、タ形の体系に含まれる「変化」という意味素性の具体的な現れとして理解出来るのではないか。

受け身文におけるタ形の意味についても考察しておく。受け身にはいわゆる「迷惑受け身」と「中立受け身」が存在する。

37) 私は地下鉄で財布を盗まれました。

38) 私は教授に叱られました。

39) 金閣寺は足利尊氏によって建てられました。

40) 1964年、アジアで最初のオリンピックが開かれました。

37) と 38) は迷惑受け身の例で、「財布を盗まれる」「叱られる」という事態が現在の話者にも影響を与えていることを含意する。したがってこれらの文のタ形はいわゆる「現在完了」としての意味を有すると考えられる。39)、40) は中立受け身文で「建てる」「開く」という動作が過去において行われたことを示す「過去」の文である。タ形の「完了」とは過去の出来事を現在に結びつけて表現しようとするものである。それに対し、タ形の「過去」とは過去の出来事を現在と峻別して表現するものだ。この「完了」か「過去」かというニュアンスは、発話者が主観的に表現しているもので100%峻別出来るものではない。

さらに、タ形は過去の事柄を表すと言っても、上記 24) では、話し手がま

だ終わっていないことを、心理的にすでに終わったように表現する例で使われている。また 26) の「命令」の用法などはモダリティ表現として、現在と結びついている。

28)、29) は方言レベルの用法であるが、標準語でも「ありがとうございます」と「ありがとうございました」の対立は時間ではなく、丁寧さの度合いを表している。ではなゼル形よりもタ形の方が丁寧さや、謙譲などと言った意味を表すのであろうか。

おそらく西洋語の「接続法」や「仮定法」の動詞形と同じく、現在の事態を現在形で表さず、タ形という過去形にすることによって現在から遠ざけ「非現実性」を出すという機能があり、その結果このメカニズムが生み出されていると考えられる。

結局、ル形でも、タ形でも、主節におけるテンス表現は、話者の主観をかなり色濃く表す。事実として未来のことがらも過去（完了）として表現することが出来るし、現在のことを過去形で表すことにより、非現実性を醸しだし、モダリティ表現ともなっているのである。モダリティ性を持つが故に、主節に特有の現象であるとも言える。

さらに、日本語のル形とタ形は同一場面で混用されるという特別な用法も持つ。まず小説の一節におけるテンスの使用を見てみよう。

41) しかしその『騎士団長殺し』という絵の中では、血が流されていた。それもリアルな血がたっぷり流されていた。二人の男が重そうな古代の剣を手に争っている。それはどうやら個人的な果し合いのように見える。争っているのは一人の若い男と、一人の年老いた男だ。

村上春樹『騎士団長殺し』第1部 顕れるイデア編 新潮社p.97

この一節は4つの文から構成されている。最初の2文は過去形、後の2文は現在形の文である。しかし、もちろん表現されているのはすべて過去の出来事である。日本語には時制の一致はないのであろうか？

このように現在形と過去形が混在していても、意味の解釈に支障が生じないのは、日本語の持つ直示表現の作用であると考えられる。直示とは基本的に「発話時における」「発話者の視点から」の表現である。しかし、日本語では発話者の意図により、「発話時」を過去に移動させたり、「視点」を現在とは異なる位置に移動させたりすることが可能になっている。

そう考えると、小説や会話で過去の場面で現在形を使って表現することも、話者が発話場面を過去にし、臨場感のある表現にしていると理解できる。直示表現としての主節のテンスは、話者が自由に設定出来るカメラアングルのように機能している。上記の 41) は小説の一節だが、会話の例もある。

42) 昨日、大通りで圭子に会ったら、急に「離婚する！」って言い出すのよ。

主節におけるテンスは直示表現であるため、参照点を設定しなくても可能な表現である。本来、参照点となるべき時の副詞や、時の表現が明示されて

いても、話者の主観で過去の事柄も「現在の場」にあるものとして表現していると考えられるのである。

次の節では、従属節におけるテンス表現について考察を進める。

3 従属節における「ル形」と「タ形」

本節では従属節に現れるル形とタ形を考察する。従属節における時制を考察する際には、ル形とタ形の交替が認められるもののみが考察対象となる。

例えば「条件」を表す従属節には基本的に時制はないものと考えられる。ル形とタ形の対立がないからである。「*」の記号は、この文が非文法的であることを示す。

- 43) 風が吹けば桶屋が儲かる。
- 44) この道をまっすぐ行くと (*行ったら) 郵便局がある。
- 45) 雨が降ったら、学校に行かない。

「時」を表す表現の場合も、ル形とタ形の対立がないことが多い。そのためこれらはテンス表現とは見なさない。

- 46) 雨が降らないうちに (*降らなかったうちに) 家に帰った。
- 47) 学生がそろってから、授業を始めた／始めよう。
- 48) ご飯を食べた後で (*食べる後で)、映画館に行く／行った。

従属節でル形とタ形の対立があるものの多くは、連体修飾節か原因・理由節になっている。

- 49) 教室に入る／入った学生は、学生証を機械に通して出席登録をする。
- 50) 台風が来る／来たので、急いで宿舎に戻った。

対立のない上記の 48) の「～た後で」などの表現では、テンスではなくアスペクトが表現されていると見なす。この点については後の節で再度考察する。

まず従属節のテンスが相対時制となり、主節のテンスを基準としている場合、つまり「参照表現」となっている場合を見てみる。

- 6) パリに行くとき、(成田空港で) ハンドバッグを買った。(再掲)
- 7) パリに行ったとき、(シャンゼリゼで) ハンドバッグを買った。(再掲)
- 8) パリに行くとき、(成田空港で) ハンドバッグを買おう。(再掲)
- 9) パリに行ったとき、(シャンゼリゼで) ハンドバッグを買おう。(再掲)

従属節に現れるル形やタ形には主節で使われたときに含意されるモダリティ的な意味はなく、純粹に時間関係のみ表すことに注意されたい。ル形の持つ「確信」「意思」、タ形の持つ「発見」「命令」「後悔」「婉曲」「丁寧」などのニュアンスは従属節では含意されない。

三原 (1992) などの先行研究では主節と従属節のテンス表現が異なるとき、従属節のテンスは「相対テンス」となり、基準は「絶対テンス」である主節のテンスが担うと主張されてきた。6) と 9) の例がそれに相当する。

6) の従属節のル形が表す事態は、主節のタ形の表す事態より前に生起する。一方、9) では従属節のタ形の表す事態は、主節のタ形の表す行為の後に生起するとされる。言い換えると、これらの文では主節のテンスが基準点と機能しているのである。

しかし、主節のテンスと従属節のテンスが同一のものであるとき、この原則はかならずしも機能しない。主節のテンスではなく発話時が従属節のテンスの基準点となる場合もあるからである。

- 51) 一昨年、パリに行ったとき、出発地の成田空港でハンドバッグを買った。
- 52) 一昨年、パリに行ったとき、行きのエールフランスの機内でハンドバッグを買った。
- 53) 一昨年、パリに行ったとき、帰りの全日空の機内でハンドバッグを買った。
- 54) 来年、パリに行くときも、シャンゼリゼで同じハンドバッグを買おう。

51)、52)、53) では、最初に「一昨年」という過去の場が設定されていたため、すべてが過去の出来事であると了解され、従属節のテンスも絶対時制、つまり発話時から見て過去の事柄としてタ形で表現されている。54) は習慣的な行為であると解釈され、主節でも従属節でもル形が使用出来ると考えられる。つまりこれらの場合は、相対テンスの基準点は主節のテンスではなく、発話時そのものが基準点となっているのである。発話時が基準と言うことは、参照表現ではなく、直示の表現であると考えることができる。

三原 (1992) でも寺村 (1984) を参考にして次のように述べている。

- 55) [1] 隣に座っている／座っていた若い男が貧乏ゆすりを始めた。

関係節が主節と同じくタ形を取る時、その関係節事態は発話時現在から振り返って描写されているような感じがあるのに対して、ル形の場合は視点をいったん主節における過去時制の時点まで引き戻して、その時点から関係節事態を眺めているような印象がある。

三原 (1992 : 22)

すなわち主節における時制は直示的であるため、過去の事態を客観的にも、主観的にも捉えることが出来るのである。過去の事態を主観的に「生き生きと」描写することから、従属節の時制がル形を取るのだと解釈出来よう。

56) 彼が泣いて頼むから、仕方なく金を貸してやった／金を貸してやることにする。

56) の場合は主節がル形であってもタ形であっても、従属節の中はル形である。この場合も従属節の事態を生き生きとした描写にするという効果があるためであろう。

さらに、以下の文の従属節はどのように解釈されるであろうか。

57) 母のつくるおにぎりは、とてもおいしい。

58) 母のつくったおにぎりは、とてもおいしい。

59) 母のつくるおにぎりは、とてもおいしかった。

60) 母のつくったおにぎりは、とてもおいしかった。

57) と 58) の意味の違いはほとんど感じられない。しかし、57) の方は一般的な意見であるのに対し、58) の方の「母」は発話者の「母」である可能性がある。つまり個別化していると言うことである。59) は 57) の文全体を過去形にしたものである。一方 60) は過去の一回限りの事態を述べているというニュアンスを表す。もちろん 60) の従属節における時制は相対時制であり主節の事態に先立つ事態を表す。

しかし以下の例では相対時制ではなく絶対時制となっている。

61) 越前海岸で自殺した女性はそこへ行くのにタクシーを使った。

(三原 [1992 : 12])

小説の一節なら、以下のように主節をル形にすることも可能であろう。

62) 越前海岸で自殺した女性はそこへ行くのにタクシーを使うことになる。

結局、主節の時制も従属節の時制も絶対時制であり、つまり過去の事態を表現しているのだが、主節の時制は直示表現として発話者が視点を過去のものも現在のようにすることによって臨場感を出しているのである。

しかしながら、寺村 (1984) や三原 (1992) で指摘されているように、絶対時制の使用にも制限が見られる。

63) 激しかった風がやんだ。

64) *激しかった風が吹いた。

65) おいしかったグラタンを捨てた。

66) *おいしかったグラタンを作った。

これらの文における主節、従属節のタ形で表される事態はすべて過去に起こったことである。しかし 64) と 66) は非文となっている。これらの文は次のように言い換えると文法的な文になる。

- 67) その時、吹いた風は激しかった。
68) 母が作ったグラタンはおいしかった。

以上の例から分かるように、非文となる例文は「吹いて」初めて「激しい」と分かったり、「作って」初めて「おいしい」と認識されるような意味関係にある。このような意味関係にある場合は、従属節と主節の事態の表現の順序に制限が設けられる。

さらに寺村（1984）は以下の連体修飾節の違いにも言及している。

- 69) 生きているエビ
70) 生きたエビ
71) 一般的にいえば、「～テイルN」のほうが、その（主節が表している）時のNの状態を表すのに対し、「～タN」は（他のものと比較しての）Nの外面的な特徴を言う感じが強い、ということがいえるだろう。

寺村（1984：198）

もちろん上記の例文 70) はそのまま主節として表すことは出来ない。

- 72) エビは生きている。
73) *エビは生きた。

このように考えると、従属節中のテンスは単に「相対テンス」の観点からではなく、修飾される名詞と合わせた意味、使われるアスペクト表現の意味などとも複雑に関連することになる。次の節では、アスペクトを意味の観点から捉え直し、アスペクトの定義を見直してみる。

4 アスペクト

先行研究では「～テイル」形の持つアスペクトなどといった観点からアスペクトが論じられることが多かった。しかし「～テイル」という形式が持つアスペクトという捉え方は妥当であろうか。

アスペクトを表す形式として、他に「ばかり」という表現がある。

- 74) 私は昼ご飯を食べたばかり だ/だった。

確かにこの例文では「完了」というアスペクト的意味を有している。しかし、この形式は他の用法もある。

- 75) 彼は毎日酒を飲んでばかり だ/だった。
- 76) 準備も終わり、後は開会を待つばかり だ/だった。

つまり、「ばかり」という形式が「完了」という意味を持つには、動詞「タ形」と組み合わせることが必要であり、他の動詞形式（テ形、辞書形）と結びつくときは他のアスペクト的意味を持つのである。そうすると「アスペクト」というのは「純粹に時間的な意味」で「要素A+要素B」で決定される意味論的な概念と捉え直すことができないだろうか。

上記の「～テイル」という形式も先行する動詞の持つ意味概念との組み合わせ、さらには共起する副詞との組み合わせによって意味が決定される。そしてこれらのアスペクト表現はル形、タ形というテンス要素と共起する。

- 77) a. 動きの進行 「コーヒーを飲んでいる/いた」
- b. 動きの結果の状態 「ゴミが落ちている/いた」
- c. 状態の継続 「道が曲がっている/いた」
- d. 繰り返し 「毎日勉強している/いた」
- e. 経験 「その本は3回も読んでいる/いた」

アスペクトは動詞+補助動詞という組み合わせで表現されることもあるし、動詞+接辞、名詞+接辞、動詞+名詞、名詞+名詞という組み合わせでも表現される。

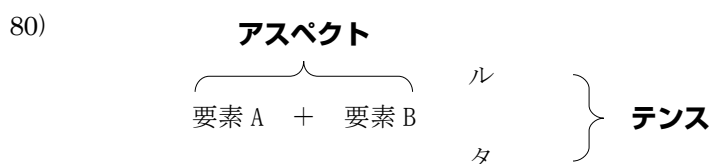
- 78) a. 動詞+補助動詞 買ってある、書きおえる、出てくる、読みきる 等
- b. 動詞+接辞 食べたばかり 来てから 等
- c. 名詞+接辞 勉強中 使用後 等
- d. 動詞+名詞 行った後 来ないうち 等
- e. 名詞+名詞 夜明け前 終了間際 等

しかしながら「ル形/タ形」の交替があるものはアスペクトではなくテンス表現であると見なす。

- 79) 食べる/食べた/食べている/食べていた ところ

この表現は従属節に現れたテンスであり、アスペクトではない。「ところ」という一種の形式名詞を修飾する連体修飾節になっているのである。

テンスとアスペクトを図示すると次のようになる。



アスペクトはシンタグマティックな関係にあり、テンスはパラダイグマティックな関係を表す。アスペクトは組み合わせられる要素と整合性を持つ必要がある。

- 81) a. 王が死ぬ前に、国が滅んだ。
b. *王が死んだ前に、国が滅んだ。
c. 王が死んだ後で、国が滅んだ。
d. *王が死ぬ後で、国が滅んだ。

このように考えると、アスペクトは時間を表す意味的な要素であるということになる。これらがテンスと組み合わせられることにより、初めて統語的な分析が必要になる。

5 | 終わりに

本研究ノートでは日本語のテンス、アスペクトについて明確な区別を行ってきた。テンスは文法的要素であり、アスペクトは意味的要素であることを主張した。テンスに関しては、主節に現れるテンスと、従属節に現れるテンスを分けて考察した。主節のテンスは直示的な絶対テンスであるが、従属節のテンスは主節時を参照点とする相対テンスであることも、絶対テンスであることもありうる。

主節におけるテンス、アスペクトの使用は従来から明らかにされてきたが、従属節におけるテンス、アスペクトの使用はまだまだ問題が多い。

- 82) 私は若いとき／若かったとき、ジョギングをしたものだ。

この文は形式としては現在形の文だが、内容的には過去の事柄を表現している。そして従属節のル形、タ形の使用についてはさらなる意味的な分析が必要である。

- 83) 眼鏡を掛ける／掛けた／掛けている／掛けていた 応募者は、不利な立場にあった。

これらの従属節に現れる形式は、日本語教育等で明解な説明が行われているとは決して言えない。従属節、とくに名詞修飾節におけるテンス、アスペクトが織りなす多様な意味の分析が今後の課題である。

参考文献

- 小矢野哲夫 (1982) 「国語学におけるテンス・アスペクト観の変遷」『日本語学』1982年、12月号、pp48-55
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 寺村秀夫他 (1987) 『ケーススタディ日本文法』おうふう
- 三原健一 (1991) 「『視点の原理』と従属節時制」『日本語学』1991年、3月号、pp64-77
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版
- 山下好孝 (2004) 「テンスの『た』とアスペクトの『た』」『北海道大学留学生センター紀要』第8号、pp1-13
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/45642>
- 山下好孝 (2016a) 「直示と参照に基づく日本語指示詞の再検討」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』23巻、pp51-62
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62975>
- 山下好孝 (2016b) 「直示と参照に基づく「だけ」と「しか～ない」の意味解釈」『北海道大学国際教育研究センター紀要』20巻、pp93-102
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65698>
- 山下好孝 (2017) 「直示と参照に基づく「前(まえ)」と「後(あと)」の意味分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』26巻、pp141-152
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/68748>

(平成30年10月28日受理、平成30年12月15日採択)

